

新人国記2』香川県・長野県・神奈川県・熊本県・奈良県』-1982.11.30

香川県  
熊本県  
長野県  
奈良県  
神奈川県



朝日新聞社

一九八二年十一月三十日刊



現代中国学 中島 嶺雄



憲法擁護 小林 直樹



作家 山本 茂実



育音出版社 小沢 和一



大和書房 大和 岩雄



バイオリン 鈴木 鎮一



非行防止 若林 繁太



理論社 小宮山 量平

ほかに名著出版中村安孝(五五)、第一法規出版社田中重弥(七三)、オーム社三井正光(七〇)、暁教育図書坪田五雄(六六)、あすなる書房山浦常克(五八)、美術年鑑油井一(七二)の各社長も。

の幕だよ」と小宮山はいった。  
上田市の生まれ。ここは大正期の創作童話童謡雑誌『赤い鳥』の自由画運動で知られる山本鼎ゆかりの土地だ。小宮山の心の中には、文化と教育の町上田に対する誇りがある。「『赤い鳥』がぼくの潜在意識にあったかな」。上田駅前前の喫茶店に「小宮山量平の木棚」をつくった。「これが、ぼくの慕だよ」と小宮山はいった。  
奥書出版を貫く出版界の名物男だ。  
「もうかるんだからね」と小宮山。『鬼の眼』は百万部を超えて、最近のヒット。「もうからないはずのもの」が、もうかるんだからね」と小宮山。奥書出版を貫く出版界の名物男だ。  
信州出身の出版人で落とせないのが、理論社会長の小宮山量平(六五)。受賞や表彰された本の数では、出版社の中でも一、二を誇る。服部之総、平野義太郎、高群逸枝らの木を出し、アジア・アフリカ関係に力を入れて、「出版界では一番商売が下手だといわれてね」と小宮山はいうが、三十三年から最も商売にならないはずの創作児童文学の出版に全力をあげ、山中恒、今江祥智、灰谷健次郎らを世に送った。灰谷の『鬼の眼』は百万部を超えて、最近のヒット。「もうからないはずのもの」が、もうかるんだからね」と小宮山。奥書出版を貫く出版界の名物男だ。

基盤にし、無名の若者を励ます木の出版が、共通の出発点だった。大和書房は堀秀彦らの木を出し、薄幸の恋人たちの手紙『愛と死をみつめて』は、百三十五万部のベストセラーになった。青春出版社は、松川事件の被告の獄中記などを出し、曾野綾子『誰のために愛するか』をヒットさせた。「ふだん本を読まない人が必要とする本をつくりたい」という小沢は、『天中殺入門』にまで手を広げている。

## 学者の里に咲く花

花の季節に更埴市の杏の里を歩いた。花の中で迷いそうになった。信州は学者の里だ。どこを見ても優れた学者がいる。大学教授だけでは足りない。町の学者、村の研究者が多いのにも驚く。肩が厚く広い。学者の里でも迷いそうである。

憲法の東大教授小林直樹(六〇)。やせぎすでまじめな容姿。平和憲法擁護の論陣を張る。「平和憲法は世界で最も進んだもので、日本にも人類全体にも意味がある」「軍隊で国は守れない」。その論法は常にストレートで、変化球で勝負することがない。「融通がきかず、原理原則でものをいって妥協しないのが信州人。ぼくもそうです。その時々状況に流される日本人の現実主義の中で、原則でものをいうことも必要ではありませんか」

小諸市の生まれ。子どものころ立川文庫に夢中だった。相撲の雷電為右衛門は隣の東部町生まれ、真田十勇士の活躍した上田も近く、「猿飛佐助の師の戸沢白雲齋がいた鳥居峠もすぐそば」だから、講談はお話でなく現実だった。「ぼくは勉強好きじゃなかった。学者になるつもりはなかった」。学徒出陣で、軍隊のあまりの非合理さを体験。復員して戻った東大で、尾高朝雄のカント「永久平和のために」の講義をきいて、学問とはこんなにすばらしいものかと思う。「小さな薄暗い教室で、寒さにふるえながら感動していた」

負けん気で筋を通すことでは、現代中国学の東京外語大学教授中嶋嶺雄(四五)もひけをとらない。昭和四十三年、大学紛争のあらしの中で研究室をめちゃめちゃにされた。貴重な資料も失った。紛

争が解決して授業が再開されたとき、中嶋ひとり、学生が反省し謝罪するまで講義はできないと頑張った。「研究室を荒らしたのは過激派かもしれないが、一般学生も傍観していた。ぼくは六〇年安保闘争のとき学生自治会にいたから、学生運動の退魔が許せなかった」

学生に襲われたのは、当時華やかだった中国文化大革命を、その最初から権力闘争とみて分析していたのが、過激派の気に入らなかったのかもしれない。中国べつたりの学者が多かった中で、一貫して党内闘争・路線闘争として分析する姿勢を変えず、学界の一匹狼で生きてきた。最近、この十五年間の論文を集めた『北京烈烈』を出版したが、古い論文での見通しが間違っていないかったという自信の表れでもある。

松本市生まれ。子どものころ才能教育の鈴木鎮一からバイオリンを習い、家には歌人の若山喜志子らも出入りして、松本の文化的な空気を吸って育った。中国に興味を持った一因には、郷土の先輩竹内好の影響もある。これからの中国を「もう激動を繰り返すことはない。一つの時代は終わり、だんだんドラマ性がなくなる」とみる。

学者の里の巨木。民族学の国際的権威の岡正雄(八三)。動物生態学の第一人者犬飼哲夫(八三)。臨海工業地帯という考え方を生み出して日本の高度成長の基礎造りをし、文化勲章を受章した土木工学の鈴木雅次(九二)。いずれも松本市生まれ。鈴木は松本中学が日本に初めてスクイズプレーを導入した時の野球部員だ。地方史の一志茂樹(八八)、日本史の児玉幸多(七一)、所三男(八〇)、洞富雄(七四)、北島正元(六九)、金井圓(五四)、計量史の室月圭吾(七五)、農業史の古島敏雄(六九)、宗教史の笠原一男(六五)。歴史関係が並んだ。

新人国記 2

定価八四〇円

朝日新聞社編

昭和五七年一月三〇日第一刷

発行者 初山有恒

印刷所 共同印刷

発行所 朝日新聞社

〒104 東京都中央区築地五丁目二

電話〇三―五四五―〇一三二(代表)

振替 東京〇一―七三〇

編集・図書編集室 販売・出版販売部